

国連大学ゼロエミッションフォーラム第三回総会記念講演会

(17/5/2002 於：UNハウス ウ・タント国際会議場)

開会の辞 国連大学副学長 鈴木基之

【鈴木】この第3回の国連大学ゼロ・エミッションフォーラム総会を、先ほど1時過ぎから1時間ほどとり行いましたが、国連大学ゼロ・エミッションフォーラム、3回目を迎えるに当たって着々とその活動が充実してきております。この総会を記念する意味で、本日、講演会をここに企画するということになりましたが、多数の方にご参加いただき、この機会に国連大学にお越しいただいたことに関しまして、まず御礼を申し上げたいと思います。

国連大学のほうも、活動が非常に多彩になってまいっております、近いところですと、全くこの同じ会場で、来週には、アメリカの前大統領のクリントンさんが来てお話をなさるとか、いろいろな企画、講演会等が行われております。昨日は、旭硝子のブループラネット賞をお取りになったノーマン・マイヤーズ博士が、やはり国連大学に来られまして、Sustainable Consumption というおもしろいテーマで、ラウンドテーブルディスカッションを開いております。ぜひ、いろいろ国連大学の活動につきまして関心をお持ちいただき、ホームページ等から情報入手いただくと、大抵の活動は公開でやっておりますので、お楽しみいただけるのではないかと考えております。

さて、きょうの講演会といたしましては、中国からお二人、特に昨年、このゼロ・エミッションフォーラムの視察団が中国の天津を訪問いたしまして、そのときからの縁ということもあって、天津の経済技術開発区、あるいは環境保護局のほうからお二人が出向いていただいて、お話を伺うというような企画、それから日本側として、川崎のエコタウンの現状についてのお話、そして経済産業省の循環型経済システムについてお話を伺い、そしてまた次の2件は特に国際連合大学の事務局長コフィー・アナンさんが、ある意味では大変力を入れておりますグローバル・コンパクトについてのご紹介がございます。これはダボスの経済人サミットの会議で、1年以上前でしたでしょうか、経済界がやはりきちんとしたノームを立てて、そこに向かって自分たちの行動に関する責任を持つというようなことで、地球とのある意味での契約というのでしょうか、そういう宣言をする、というような考え方を出されたものであります。これは、日本側では国連広報センター、この建物の中にありますが、広報センターがそのいわば受け皿になっておりますが、まだ日本の企業は、恥ずかしいことに、ほとんどここに参画をしていないという状況であります。世界的には1,000を超える会社がグローバル・コンパクトの宣言をしているわけであります。

このようなことで本日は6件のご講演をいただくわけではありますが、大変充実した講演会となり、ご出席の皆様方にも刺激を受けていただけるのではないかと思います。

総会の冒頭の講演におきまして、ゼロ・エミッションフォーラムの会長の山地さんから、近年の持続的発展というような方向でのお話をいただきましたが、循環型社会とか、循環型社会形成推進基本法、あるいはゼロ・エミッションという言葉も、大変世の中に広く使われるようになってまいりましたのは、御同慶の至りでございますが、それだけ広がってくればくるほど、逆に理念としてある意味ではあいまいになっていくところがございます。リサイクルをすればいいのではないか、あるいはごみを仕分けして、次の下請けにお任せすればいいのではないか、そういうようなところから始まり、またリサイクルに熱が入る余り、局所的なところだけに目を奪われるというようなこともないわけではございません。

ゼロ・エミッションというのは、山地会長のお話にもあったわけですが、やはり廃棄物だけではなくて、その上流側に上がって行って、生産そのものをどう改変していくのか、資源をどういうふうに有効に生かしていくのか、あるいは最少の資源で最大の、抽象的な意味での富を生んでいくにはどうするのか、そういうようなことが重要な考え方です。したがって、決して出口だけの問題ではなくて、社会全体をどう考えていくのか、さらには、さかのぼりますと、我々の生き方、ライフスタイルそのものをどういうふうに変えていくのか、あるいは文化をどう変えていくのか、そこが非常に重要な部分であろうと、私自身思っております。

そういうようなことで、ゼロ・エミッションというような考え方をさらにブラッシュアップして、それを達成する方向に動いていくためには、単に技術的な問題だけではなくて、いろいろな側面からいろんなことを考えていかなければいけない。技術、社会、それから人間のデベロップメントも必要になりますし、文化的な側面も考慮しなければいけない。ゼロ・エミッションフォーラムは非常に幅広い活動を今後も続けていくことになりますので、その中の幾つかの話題がきょうここで話しただけのものをご了解いただければ幸いです。

ざっと私たちがこの企画に当たりまして、あるいはゼロ・エミッションフォーラムを運営していくに当たりまして、ふだん考えておりますことの一端を申し述べさせていただきまして、歓迎のあいさつにかえさせていただきたいと思っております。

きょうは、ほんとうに国連大学においでいただいて、ありがとうございました。